

なまえつけてよ

蜂飼 耳作 佐藤 真紀子 絵

／ 学校からの帰り道のことだ。牧場のわきを通りかかったとき、春花は、そこに見なれない子馬がいることに気がついた。

2 つやつやした毛なみの、茶色の子馬だ。立ち止まってじっと見ると、目が合った。子馬は、ばちりとまばたきした。春花は、その美しい目に、すいこまれそうな気がした。

3 作業をしていた牧場のおばさんが、手を止めて、春花に話しかけた。

「この子、生まれたばかりなの。」

「名前、なんていうんですか。」

思わず、春花はきいた。

「名前、まだ考えてないの。そうだ、名前、つけてよ。」

4 一年生のときから、毎日、その小さな牧場のわきを通って通学しているの、牧場のおばさんとは、いつのまにか顔見知りになっていた。でも、あいさつをするだけだ。それなのに、子馬に名前をつけさせてくれるというのだ。

「じゃあ、考えてきます。あしたまでに。」

「たのおね。」

5 おばさんと子馬に手をふると、春花は歩きだした。歩きなれた通学路だ。けれど、まるで知らない道を歩いているような気がしてくる。

6 名前をつけてと任せられるなんて、初めてのことだ。これまでに自分で名前をつけたことがある生き物を思い出す。お祭りのときにすくった、おとなしい金魚。それだけだ。



ク どんな名前がいいかな。春花は、頭の中に子馬のまぶしいすがたを思いえがきながら、帰り道を歩いた。

8 そのときだ。道の角から、ふらりと勇太ゆうたが現れた。弟の陸りくを連れている。

9 勇太は、ひと月前に、遠くの町から引っこしてきた。

「今度、同じ組になるの。仲よくしてやってね。」

春花の家へあいさつに来たとき、勇太のお母さんはそう言った。

10 春花は、はい、と答えたけれど、実際には、どうしたらいいか、分からなかった。話しかけても、勇太はあまりしゃべらない。でも、陸とは楽しそうに遊んでいる。親しくなるきっかけは、なかなかつかめなかった。

「牧場に子馬がいるんだけど、気がついた。」

春花はきいてみた。勇太は目を合わせない。ただ、足元を見ている。

「あその牧場で子馬が生まれたんだよ。あたし、子馬の名前を考えてって、牧場のおばさんから、たのまれちゃった。」

「わあ、すごいね。なんてつけるの。」



11 目をかがやかせたのは、陸のほうだ。

12 勇太は顔を上げて、ちらっと春花の方を見たら、でも、すぐに目をそらした。

「まだ言わないよ。明日の放課後、牧場のところに来て。そうしたら教えるから。」

「今、教えてよ。今、知りたい。」

陸が早口で言った。陸は、二年生だ。

「もう行こう。」

13 勇太はぶいっと向きを変えて、歩きだした。陸は二、三度、春花の方をふり返りながら、勇太についていった。

14 「なによ、その態度。」と言いつつになっただけで、春花は言葉をぐっと飲みこんだ。

15 近所のおばあさんが、家の前の落ち葉をほうきで集めて、そうじをしていた。小さいころから知っているおばあさんだ。

「こんにちは。」

春花は、あいさつをした。

「おかえりなさい。あれ、春花ちゃん、五年生になって、なんだか急に大人っぽくなってきたみたい。」

16 おばあさんの飼っているねこが、木と木のすき間から現れた。ねこは、ぼんすけという名前だ。

「ねえ、おばあちゃん。ぼんすけは、

どうして、ぼんすけなの。」



飼う

子馬の名前のヒントにしようと思って、きいてみる。

「さあ、どうしてかしら。おじいさんが決めたから、分からないわ。」

そう言って、おばあさんは、ほほえんだ。ぼんすけは、ふわあ、とあくびをした。それから、しっぽをゆらりとふって、すがたを消した。

17 夜、ふとんにもぐりこんでからも、春花は一生けんめい考えた。あの子馬に似合う名前をつけたい。

18 子馬の特徴を思い浮かべてみる。クッキーのような、おいしそうな色。くりくりとした丸い目。ふっさりとしたしっぽ。今はまだ子どもだけれど、大きくなったら風のように走る馬になってほしい。そんな願いがわいてくる。

19 考えているうちに、春花の心に、一つの名前がうかんできた。心の中で、子馬につけた名前をよんでみる。春花は、安心してねむりに落ちた。

20 次の日の放課後、牧場のさくのそばへ行くと、前の日と同じところに子馬がいた。春花は、子馬をながめながら待った。もしかして、勇太は来ないかもしれないな

似合う

いな。なめらかなたてがみ。真っ黒な目。時間がいつもよりゆっくりと流れていく。
「おうい、来たよ。」

21 陸の声がした。急ぐ陸の後ろから来るのは、勇太だ。

22 風がさあつとふきぬけた。子馬はびくびくと耳を動かした。勇太はきいた。

「名前、なんてつけるんだ。」

23 ちようどそのとき、牧場のおばさんが建物から出てきた。

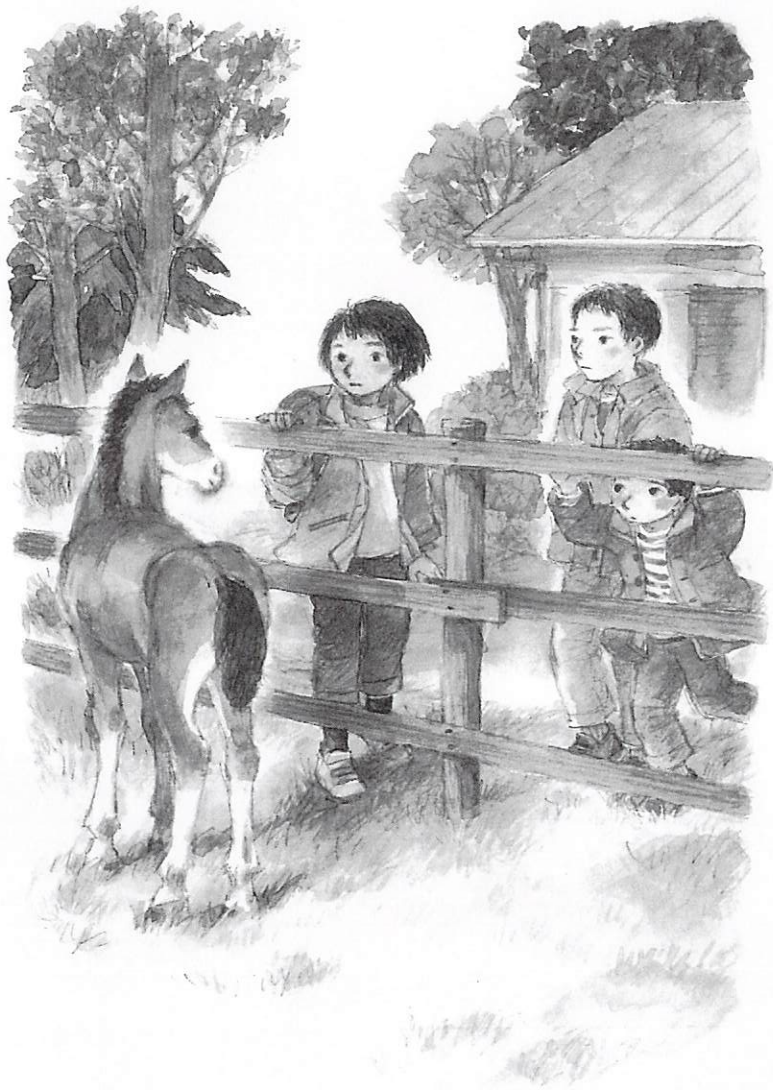
「あらあら、みんな、来てたのね。」

「子馬の名前——。」

春花が言いかけると、おばさんはあわてた。

「ごめんね、そのことなんだけど。あのね、その子馬、よそにもらわれることになったの。急に決まったのよ。だから、名前も、行った先でつけられることになったの。たのんだのに、ごめんなさいね。」

24 春花は、だまっただまま、さくからつき出た子馬の鼻にさわってみた。子馬の鼻は、ほんのりと温かく、しめっている。



「がっかりさせちゃったね。せっかく考えてくれた名前、教えてくれる。」
「いいんです——。それなら、しかたないですね。」

25 春花は、子馬の鼻にふれたまま、明るい声でそう答えた。勇太と陸は、何も言わない。二人とも、こまったような顔をして、春花の方をじっと見ていた。

26 次の日。昼休みに、春花はろう下で勇太とすれちがった。そのときだった。春花はそっと何かをわたされた。わたすと、勇太は急いで行ってしまった。

27 受け取ったものを見て、春花は、はっとした。

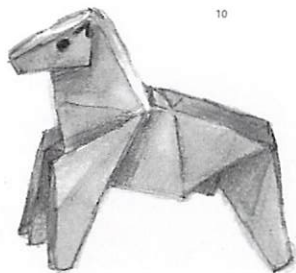
28 紙で折った小さな馬。不格好だけれど、たしかに馬だ。

29 ひっくり返してみると、ペンで何か書いてある。

30 なまえつけてよ。

31 らんぼうなぐらいに元気のいい字が、おどっている。

勇太って、こんなところがあるんだ。



不格好

32 まどからは、昼休みの校庭が見える。明るい校庭には、サッカーをしている子たちがいる。その中に、春花は、ボールを追いかけている勇太のすがたを見つけた。ありがとう。春花は、心の中でつぶやいた。



蜂飼耳

一九七四年、神奈川県生まれ。詩人・作家。「のろのろひつじとせかせかひつじ」「うきわねこ」などの作品がある。